

7. 歴代会長インタビュー

第9代菅野 茂会長，第10代若尾義人会長，第11代局 博一会長，第12代廣瀬 昶会長の4名の会長にインタビューをさせていただきました。会長就任当時の心境や会長時代の思い出，ご自身が取り組まれた研究テーマ，学会や若手研究者へのメッセージなどについて語っていただきました。



第9代 菅野 茂会長



第10代 若尾義人会長



第11代 局 博一会長



第12代 廣瀬 昶会長

インタビュワー：野村始子

1960年、東京生まれ。大妻女子短大英文科卒業後、一般企業（野村証券・ソニーテクトロニクス）を経て、モード学園出版局に入局。雑誌の編集に携わる。1992年よりフリーのライターに。2000年頃より、ジャンルをウェルネス&ビューティを中心に活動。

【これまでに関わった内容】

- ・ウェルネス：幹細胞がもたらす美容効果，酵素のチカラ，不眠，不妊，前立腺ケア，心療系
- ・インタビュー：美容皮膚科医，企業の社長，作家，女優，タレントなど
- ・スキン&ボディケア基本のお手入れ，エイジングケア，美容医療まで

第9代 菅野 茂会長 インタビュー

私が9代目の会長に就いたのはもう20年前です。当時は今のよう
に選挙はありませんでした。その前10年間、助教授時代から副
会長をやっていましたし、事務局は東大にあって、自分の研究
室は東大。先代の高橋 貢会長に「次、やってよ」と言われ、逃
げようもなく就いた次第です。東大定年の1年前の98年は東京農
工大の生物生産学科の教授を併任しましたが、99年まで5年間、
二期務めさせていただきました。



野村 当時の心境を先生は94年発行の「動物の循環器 vol. 27号」
で身の引き締まる思いと記されておりますが。

菅野 戸尾祺明彦前々会長，高橋 貢前会長のもとで10年間，副会長をつとめたとは言え，副会長は会長の影に隠れたサポート役ですが，会長は学会の代表ですから新たな緊張感がありました。同時に獣医循環器学会会長のポストは必然的に心電学会の理事となる慣例がありましてね。日本心電学会の常任運営委員から理事となり，責任ある日々を過しました。

野村 「日本獣医循環器研究会」から「日本獣医循環器学会」に変わったのも菅野先生の会長時代ですね。

菅野 はい。研究会の時の任期は2年でしたが，学会になって3年となりました。研究会の時は家畜心電図学の発展と普及を目的としていましたが，学会になってからは広く動物の循環器学に関する学術の発展と推進を目指すことになりました。会員数は当初，400人くらいでしたが，現在は1000人。私が会長を辞めてからですが，認定医制度を発足させた功績は大きいと思います。若尾先生以下，ほんとに良くやられたと思います。

野村 当時の学会は、どのような状況にあったのでしょうか。

菅野 医側の先生たちは動物の情報を欲していました。私は「ビーグル犬の心臓血管の特性に関する研究」で学位を得ましたが、そういう情報を医側の先生も大変欲しがっておられた。逆に我々動物側としては、人の突然死や不整脈に関する理論や情報が欲しいわけです。動物側は心電図ひとつとっても動物によって全く波形が異なる場合が多いので、不整脈の解析も一律にはいきません。そこでお互いにギブ&テイクの交流が盛んとなり、人間側と動物側の連携が深まっていった印象が残っています。

野村 最も尽力されたことをひとつあげるなら？

菅野 製薬会社や受託研究機関の研究者達から、動物の循環器についてよく勉強したいという声が上がっていました。獣医循環器学会としてこれはぜひ啓蒙していくべきと、テキストを作って講習会を開きました。心電図だけでなく、血圧にまで範囲を広げて行いました。人も沢山集まり反響がありました。業者の人ともずいぶん共同研究をしました。マウスやラットの尻尾で測る血圧計の開発にも協力したり。あとは機関誌の刊行にも力を注ぎました。

野村 会長に就く前、先生は編集委員長をやられていたと聞いています。

菅野 ええ。発行回数も年1回から2回に変わった頃で、学会の発展に機関誌の刊行は必須だと考えていました。学会というのは成果を学会誌として公表することで存在価値が高まります。講演会で話すだけでなく、記録に残すことが大事です。余談かもしれませんが、機関誌の表紙のデザインは、心臓の電気軸、興奮伝導を意味しています。創刊当時、麻布大の獣医学部を出て東大のドクターコースで学んでいた鈴木眞理さんがデザインしてくれたものがそのまま使われています。

野村 現在はJ-STAGE（独立行政法人科学技術振興機構のシステム）によって前身誌の『家畜の心電図』の創刊号から『動物の循環器』の最新号までのすべてが、インターネット上で見るできるようになっていますね。

菅野 このシステムを構築してくれたのは局会長時代に副会長であった中田義禮氏の努力のおかげです。しかし、頭で情報を得るだけでなく、自ら体験することを疎かにしてはなりません。私の座右の銘は「農学栄えて農業減ぶ」です。研究室に閉じこもっていないで外に出ることが大事と思っています。

野村 実学の大切さですね。

菅野 実学主義によって東京農業大学の発展に力を注いだ横井時敬元学長の有名な言葉ですが、獣医循環学にも通じるひとつの信念だと思えます。少なくとも、動物を扱う者としては、切り出した細胞ではなくまるごとを見るのが大事です。細胞で証明できても、実際は違うことがたくさんあるのですから。

野村 先生のフットワークの良さは、学会内でも有名ですね。

菅野 「また来た」と言われても、年2回の定例学会にはできるだけ参加するようにしています。年1回開催の学会が多い中で、年2回の開催は評価すべきところですよ。会員には地方の開業獣医の方々も多く、いろいろな症例報告や症例検討は非常に役に立つと思われまふ。私自身はもはや耳学問、眼学問だけの立場ですが、志を同じくしている人々と集えるのも参加の楽しみのひとつと思っています。

野村 では最後に、今後の日本獣医循環器学会へのエールを。

菅野 各地の学会員が症例検討会をあちこちで開いているという報告が耳に入ってきます。それはとても喜ばしいことです。ぜひ続けていただき、機関誌が一層充実していくことを期待しています。また、獣医循環器学会として「誘導法」に関しては特に注目していくべきテーマだと考えています。

第10代 若尾義人会長インタビュー

私が会長になった1999年当時の世の中は右上がり。獣医循環器の世界も向学心のある学生や研究者が増えていました。にもかかわらず、会員数は頭打ち状態でした。会員を増やすことは、ひとつのお題になっていました。会員数は10年間横ばい。僕は付加価値の必要性を感じていました。そこで認定医制度へと話は繋がっていくわけですが、当時、欧米では専門医制度のシステムが確立されようとしていました。我々も同じ方を目指していくべきだということで動き出したのです。



野村 専門医ではなく、認定医とした背景をお聞かせ願えますか。

若尾 専門医には、訴訟問題にも応じられるスペシャリティが求められます。当時は、そこまでの成熟度はなかった。まずは循環器学に対する知識の統一を図ろうと。そして将来的に専門医制度を目指そうという二段構えでスタートしました。

野村 認定医とは別に、認定研究者制度も設けたのはなぜですか。

若尾 企業で研究職に就いている会員さんもたくさんいたからです。資格に対する要望はかねてからありました。制度の発足から14年、就職や昇給の利点となる資格に昇格したことは嬉しい限りです。厳しい条件をつけてやってよかったと思います。

野村 2003年から会員数が急激に増えましたね。

若尾 制度を作っただけで尻つぼみにならないよう、認定医講習会の内容には力を注ぎました。初めは大学の先生たちに講義をお願いしましたが、2002年に18名の合格者が出てからは、その中から講義を受け持てる人が現れて、よい風が吹き始めました。

野村 昨今はペットも高齢化。「難しい病気は専門医に診てほしい」という飼い主さんの声もあります。そろそろ専門医制度という、第二ステージに来ているのではないのでしょうか。

若尾 専門医は、インターナショナルで認定される必要があります。非常に難しき門ですが、実際、日本にもアメリカやヨーロッパに行って専門医のディプロマを取得する獣医師がいます。10人以上はいる。そんな中、僕はずっとアジア圏での専門医があってもよいのではないかと思ってきました。

野村 実際、動きはあるのですか。

若尾 10年くらい前に専門性の高い先生たちが集まって、アジアの専門医学会を作ってア

ジアのディプロマを作ろうという動きはありました。定年（2010年）を機に離れてしまったので、現状は掴めていません。どんな世界もそうですが、ひっぱって行く人がいないと。

野村 若尾先生の「ひっぱり力」はどこから来ているのですか。

若尾 僕は、何をやるにしてもあまりマイナス思考は持たないと決めています。とりわけチームでやっていく場合は、トップがマイナス思考になると物事が止まる。そうすると「止まり」の連鎖が起こってバラバラになる。体験からも非常に感じるところです。困難にぶつかっても不安があっても、とにかく引かない。あたって砕けちゃまずいけれど、精一杯あたってみる。そこから生まれることが、僕の人生でも必ずありました。治療も手術もそう。結果として命を落とし、飼い主さんに非難されることもあったけれど、精一杯やるしかない。

野村 現在は動物看護の大学で教鞭をとっていらっしゃいますが。

若尾 第二の人生に動物看護の世界を選びました。将来の国家試験化を視野に入れて、優秀な看護師を育てるためのカリキュラム作りの真っ最中です。数多くの開心術をやってきて、術後をしっかり任せられる看護師の養成の必要性を身にしみて感じてきたからです。獣医のアシスタントを超えた、獣医と同じレベルで物事が捉えられる看護師を育てたい。動物の医療全体の底上げのためにも、必要なことです。獣医の側も「言うことだけやってくればよい」という思いを改めればより多くの動物を診ることができる。循環器の病気で苦しんでいる動物は山ほどいるわけですよ。

野村 今なお現役でご多忙ですが、趣味に費やすお時間はありますか。

若尾 やりくりして楽しんでいます。趣味は学生時代自分でもやっていた演劇を見ること、オーディオ、カメラ集め、釣り、定年後に始めたバードウォッチング。インドアとアウトドア、両方あって全天候型。カメラは75台、釣り竿も増えちゃって。鳥の動作って、ものすごくかわいいんですよ。のめり込んでいます。のめり込むといえ、学問というのはいろんなことがまわりにあっても、そこにめりこむことができる世界です。若い人たちには、とことんのめり込んで、そういう世界にいるすばらしさを享受してほしいと思います。

野村 最後に、日本獣医循環器学会へのエールもお願いします。

若尾 会員千人の学会へと成長したことは喜ばしいこと。しかし、また頭打ちになる時が来るだろうから、どう対応するかを考える必要がある。僕は国際的な視野に立つことが、学会が発展していく要素だと考えます。そのためにもプラス思考で、攻めていくことを期待しています。

第11代 局 博一会長インタビュー

僕は事務局を長くやっていました。それで「学会のこともよく知っているから」という理由で、会長職の話が来ました。もちろん正式には総会で承認していただきましたが。就任当時の2004年の会員数は600人ちょっとでした。幽霊会員もいましたが僕は気が小さく、年会費滞納の会員に直ちに退会して頂くなんてことはできず、見かけ600人位、実質500人位の状態を続けていました。前任の若尾先生が非常にいい風を起こしてくれていましたので、それを止めたくないという思いが強くなりました。



野村 いい風というのは？

局 若尾先生はいろいろな分野の先生方に注目していただける企画や講習会の開催に尽力なさっていました。結果、大学の先生だけでなく、多くの開業獣医師も惹き付けることになり、学会に求心力が生まれ、注目度もぐっと高まっていました。

野村 局先生が認定医制度の立役者と聞いています。

局 立役者というより、身勝手役者です。若尾会長時代、僕は事務局の立場で、あまり相談もせずポイント制度を作ってしまった。学術大会にただ参加するのではなく、将来への目標が生まれるよう何かお土産をつけよう的な軽い気持ちでした。勝手にやったから初めはおしかりも受けたのですが、けっこう反応があって。この際、中途半端なことをしていないで、きちんとした制度を作ろうという話になりました。それが認定医制度に繋がっていきました。一段と士気があがったのを今でも覚えています。僕が会長になった時は、認定医制度発足から2年が経過して、認定医講習会にも立ち見が出るくらいになっていました。

講習会参加者には多くの非会員が含まれていましたが、非会員にも解放したことが功を奏しました。講義室が若い聴講生で満杯になっている風景が脳裏に焼き付いています。それが本当に嬉しかった。自分たちのやっていることが間違っていないという確信にもなりました。

野村 講習会はどのような形で行なわれていたのですか。

局 認定医委員会の先生方の御尽力で、若い臨床の先生方にもどんどん入っていただいて、講義をお願いしました。忙しい中みなさん熱意を持ってやって来て、本当に有難かった。参加者も多くが若手でしたから、そこにいい共鳴も生まれました。臨床の先生方は日頃は循環器だけをやっているのではなく、いろいろな分野も同時に研究されている。その体験を交えた講義がとても上手で、僕も聞き惚れました。教科書に書いてあることばかりではない、

現場の感覚が伝わってくるので非常に勉強にもなりました。

野村 よく話題になったことはありましたか。

局 日本の大学における臨床教育の遅れについて。本来は大学で教えるべきだ、とはいえ大学の学部教育にも限界があるからインターン制度を作るしかないとか。そういう議論の中で、現場感覚を携えて貢献できるのはやっぱり我々じゃないか、日本獣医循環器学会は生涯教育の場として活動していこうと。そのような機会を与えることで我々自身も勉強になるし、時間はかかっても成熟していくのではないか。「将来、日本獣医循環器学会の認定医を目指したい」といった、若い獣医師のコメントをどこかの記事で見つれたりすると、涙が出るくらい嬉しい。そういう面では、十分社会貢献ができていないのではないかと思います。

野村 当時、先生が関心を抱いていたことは？

局 ちょうどそのころ人のQT延長症候群が問題になっていた。人の医療にも役に立つデータがどれくらい埋もれているのかを探していました。でも当時は犬のQT延長症候群なんて聞いたこともなく、非常に丹念にデータを録られていた内野富弥先生にもお世話になりました。稀にQT延長を自然発生で起こす飼犬がいても、「これで命を落とすことはまずない」と。心筋梗塞もみられない。人と同じように自然発症があったら動物の循環器は現在よりもさらに注目を浴びるはず。研究者として、それはずっと感じてきたことです。

野村 プライベートは。

局 40代から馬の利活用に興味を抱くようになり、現在、馬介在療法の研究や現場の仕事もやっています。馬に乗ると揺れが体に伝わって、脳のネットワークがよくなる。感覚統合が促進されます。リハビリをしても現状維持がやっただという交通事故や脳卒中の患者さんも、馬に乗り始めて3ヶ月、半年でずっとよくなる。最近は科学的なデータを増やそうということで、医師や理学療法士、作業療法士と連携してデータを集めているところです。東北の被災地にポニーを連れて行って子供たちと触れ合ったりもしています。

野村 では、バトンを受け取るみなさんへ一言。

局 研究は始める時は思い込みが必要。それを実証するための実験を考えてデータを出していく地道な作業。でも、ある程度データが出たら、最初に考えた作業仮説が本当に正しかったかを見極めることがとても大事です。なぜなら思い込みが強すぎて、無理矢理にでも証明したくなるから。データによっては勇気を持って作業仮説を立て直す。自分の経験からも、研究者に必要なのはスイッチングと発想の転換だと言えます。あとは、人から依頼されたことは、必ずしも自分の専門でなくてもなるべく引き受けるように心掛ける。そこから別の世界が開け、思わぬ自分を発見することもある。見てくれている人はちゃんとして、そうやっているうちに、いつしかその道の専門家になっていく。「迷ったら引き受ける」。これは昔、

先輩に言われて耳に残っている言葉なのですが、今になってみると全くその通りのように思います。日本獣医循環器学会の多くの有志の方々が未来指向で次世代を担っていってくださることを願っています。

第12代 廣瀬 昶会長インタビュー

私が会長になったのは2007年。定年に近い年齢で経験もあるし、他の学会との付き合いもあるし、顔もそれなりに広いからということで選ばれたのだらうと思います。当時は61歳、日本獣医生命科学大の獣医内科学教室におりました。授業と自分の研究と、臨床系なので診療もやっていました。

当時の会員数は700名くらいでした。大きな学会とは言えないまでも、中くらいの規模の学会に成長していました。会長に選ばれたからと、私が単独で何かできるほど小さな組織ではありませんでした。



野村 歴代の会長さんを見ていくと、基礎系の方と臨床系の方がほぼ半々ですね。

廣瀬 はっきり決まっているわけではありませんが、会長は臨床系と基礎系の人間がなるべく交互にやっていくのがよいのではないかという、暗黙の原則があります。どっちがいい悪いではなく、「企画に偏りを出さない」という理由からです。どうしてもデータが欲しい基礎系と、異常や治療に対してピンポイントで答えを知りたい臨床系。基本自分たちの情報を出すわけにはいかないけど情報が欲しい基礎系と、情報を交換しあってなんぼの臨床系。求めるものが違います。

野村 臨床系と基礎系の会員はどのような割合だったのですか。

廣瀬 詳しくは分かりませんが、臨床をやっている人のほうが若干多かった印象は持っていました。実際、認定医の資格取得のための企画に集まる人が多かった。

野村 反響が大きかった企画で印象に残っているものは？

廣瀬 実験動物の心臓の検査法や外科的手術のデモンストレーションなどですかね。人間用の器械を動物に応用するための講習会は好評でした。動物用の検査機器は確かにあります。あるのですが、コストのかかる動物用の器械を全部揃えるのは至難。人間と動物では解剖学的に、位置関係と毛むくじゃら度は多少違ってても、あて方の工夫をすれば心電図もX線も超音波検査機器も人間用で十分こと足ります。情報交換の場としてもよく機能していたと思います。

野村 一方で、ご苦労はありましたか。

廣瀬 機関誌への投稿が少なかったことです。2001年から機関誌への投稿が増えることを期待して、「日本獣医循環器学会最優秀論文賞」と「日本獣医循環器学会症例報告賞」を授

与することを決めましたが、いやはや思うように集まらなかった。いちばんの理由は、年に2回しか発刊していないことにあります。大学や研究所で業績として認められるには、やはり年に4冊以上の発行が必要です。ただ、学会の存続のためには機関誌は必要。歴代の会長が苦勞している点だと思います。業績になるところに投稿したくなるのは人の心理。日本獣医循環器学会の存在価値は確実に高まっていますから、年4回の発行になったら貴重な投稿が増えると思います。

野村 当時はどのような研究をなさっていたのですか。

廣瀬 「心機能に対するストレス状態の影響」に関する研究を続けていました。ストレスホルモンの測定はライフワークでした。実際ストレス状態に入ると、食欲中枢が抑えられたり、副腎皮質ホルモンが増えたり、感染に罹りやすくなったり、心拍数も増えたり。ストレス反応として、血糖値を上げて攻撃に出る場合と逃げる場合があります。どういったことをやってあげれば解決できるのか、までいけなかったのは、現職を退いた今、いささか心残りです。

野村 廣瀬先生には、この「50年史」の編集に携わっていただいておりますが、今後の学会に期待することをお聞かせ願えますか。

廣瀬 何か調べものをしたいとき、これまでの発行物を紐解けばわかることが多々あります。でも、ほじくり返すのは大変な作業。動物毎の心電図の正常値だとか、検査毎の正常値とか、インターネットを利用した閲覧やデータベース化を進めていけたらと思います。それは時代に逆行しないためにも、非会員にも情報を公開できるのが最善ですが、だれもが検索できるようになると、やはりそこには飼い主さんからのクレームもきかぬません。公開したい検査法や治療法はあっても、結果だけをのせるしかない現状はあると思います。一方で、臨床系の進歩は著しく、自分が大学時代に勉強した内容が通用しないことはたくさんあります。ブラッシュアップに役立つような学会に成熟していくことを切に願います。

野村 時代を担っていく若い世代へ一言

廣瀬 実験動物反対の声も強く、薬の開発ひとつとっても研究がしにくい環境が育っていると思います。国からの研究費の補助も昔ほど潤沢ではありませんが、試練の時代に負けるなと伝えたいですね。